世界の水問題について話し合う「第3回世界水フォーラム」の中の主要イベントとして「世界子ども水フォーラム」（ユニセフなどの共催）が、今年3月18日から22日にかけて、滋賀県と京都府でひらかれました。「世界子ども水フォーラム」には、世界32カ国から12歳から18歳までの子どもと若者109人が参加しました。そして、ユニセフ子どもネットワーカーの大鳥由香子さんと吉田倫哉くんも日本の子ども代表のひとりとして選ばれました。

©UNICEF/HQ99-0958/Jim Holmes

「世界子ども水フォーラム」に子どもネットワーカーが参加したよ！

世界32カ国の109人の子どもたちが『子ども水宣言』を発表

多様な世界を代表する子どもと若者がかかえる問題は、やはり多様でした。ケニアのイボンヌ・マインゲイさん（15）は、「学校に清潔で安全な女子トイレがないために、学校に行けない女の子がいます。水と衛生の問題は女の子の教育とも関わっています」と語りました。韓国から参加したジーワン・キムさん（18）は、「水の問題というと、韓国では汚染など環境問題をイメージします。先進国と開発途上国で水の問題の質や認識が大きく異なることにおどろきました」と感想を述べました。イラク戦争がはじまった3月20日には、ナイジェリアのテミダヨ・イスラエル・アブデュライくん（17）が、「戦争に使うお金を、水と衛生に関わる問題の解決のために使ってほしい」と語りました。

多くの子どもたちが、毎日水くみの仕事をしています。そのために学校に行く時間のない子どももいます

©UNICEF/HQ99-0646/Giacomo Pirozzi

©ガールスカウト

©ガールスカウト

参加した各国の子どもと若者たちは、3月21日、最終文書『子ども水宣言』を発表しました。『子ども水宣言』は、国の政策を決める人びとに、子どもの権利条約にしたがって、子どもと若者がすこやかに育つことのできる安全な環境をつくり、子どもと若者の参加や保護、生存、発達を確保することを求めました。記者会見にのぞんだカナダのジャフリン・タルクデールさん（13）は、「先進国は水を浪費しています。私たちはもっと節水を心がけるべきです」と話しました。また、バングラデシュのファズレ・ラビーくん（14）は、「文化、宗教の違いを乗りこえて、水と衛生に関する問題解決の方法を話し合うことができました。子どももおとなも、みんな協力してほしい」とうったえました。日本からの参加者のひとりである南部玲生くん（14）は、故郷の北海道の自然について語り、「子どもたちに美しい水、そして自然を残すことができるよう、おとなたちに呼びかけたい」と話しました。

参加した子どもと若者たち　©ガールスカウト

Report 大鳥由香子さんからの報告

「世界子ども水フォーラム」には、109人の子どもたちが参加し、日本からの参加者は50人でした。このフォーラムは、「第3回世界水フォーラム」の主要プログラムとして、子どもと若者が水と衛生に関する問題についての知識を深め、それぞれの意見や体験を交換し、子どもと若者の意見をコミュニティーや地域における意思決定により多く反映させることを目的としていました。

2日間の準備期間の後、20日から2日間にわたって本会議がひらかれ、右の4つについての報告と話し合いがおこなわれました。

① 家庭における水の確保
② 学校環境での水と衛生
③ 水にまつわる危機
④ 水と自然・遊び・文化

分科会で報告された、世界各地の水問題は多岐にわたり、参加者の意識の溝は非常に大きいものでした。同時に、宣言文の起草、文化、評価、メディアの4つの委員会がつくられました。

21日に2日間の成果である、『子ども水宣言』を採択して本会議は終了しました。宣言には、水と衛生に関する設備を改善すること、国際的な子どものネットワークをつくること、政府の意思決定に子どもたちを関与させること、などがふくまれました。

中央が大鳥さん

『子ども水宣言』の主張

＊ 政府は次のようなことをおこなう義務があります

- 水にかかわる計画をたてたり、実行したり、評価したりするときに、子どもや若者が参加できるようにする
- とくに女の子が学校を途中でやめなくてすむように、学校の水と衛生の施設ために十分な予算をとる
- 先進工業国と開発途上国の間で、水に関する情報・技術・経験を共有できるようにする
- 緊急事態にそなえて、社会のさまざまな基盤やサービスを整備する
- 水についての子どもと若者の意見や、異なる文化を大切にし、子どもたちが遊べる安全な水辺を整備する
- 子どもたちや学校の先生、親、地域のリーダーなどのために、水に関する課題について環境教育をすすめる
- 水と環境についての子どもと若者のプロジェクトや活動を支援する

＊ そして、子どもと若者は次のようなことを約束します

- 水や衛生についての活動を地域や国内、そして国際的におこなうために、グループやネットワークをつくる
- 子どもにやさしい資料をつくったり、おしばいや詩、絵、ウェブサイトなどをつかったりして、子どもたちが水や衛生について学習し、意識を高められるようにする
- 農村や都市、地域社会で、水と衛生の施設を改善するように、政府などにはたらきかける
- 子どもが運営する水と衛生のプロジェクトなどの計画、実行、評価に参加する

（宣言文から抜粋・要約）

Report 吉田倫哉くんからの報告

吉田くん

『閣僚との対話』プログラムに参加しました。これは、国内外のNGO関係者・一般参加者600名と世界各国から参加している閣僚が直接を意見を交換できる唯一のプログラムでした。「世界子ども水フォーラム」からは、ケニアのイボンヌさん、マリのアダムさん、そしてぼくが代表で参加しました。

ここで話し合われたテーマは、「世界水フォーラムが終わってから、政府・民間・市民などの各セクターがどういう取り組みをするか」でした。ぼくのテーブルには、4人の一般参加者代表と2人の閣僚が参加し、「忌憚のない（遠慮のない）」意見を交換するかたちでした。しかし、「水道を民営化したい」政府側と「したくない」NGOが対立したり、ありきたりな主張が乱立して、期待はずれな議論でした。

子どもは、勢いのあるおとなによってその存在を見えないものにされていました。たとえば、ぼくの主張は「水は人類すべてのものであるから、政策決定に一部のおとなたちだけではなく、未来から来ている子どもも関わっていくべき」というものでしたが、ある政府の高官は、それは教育などキャパシティー・ビルディング（能力向上・開発）の問題だ、とぼくの主張をよく話し合いもせず退けました。怒りとともに無力感を感じました。おとなたちはそうやって意味のわからない言葉を使ってごまかすのです。

ぼくは、正直にいって、無気力におちいっています。おとなになりつつある自分、つまり無責任なおとなに近づく自分はこれからどうすべきか見えないからです。しかし閣僚だけにまかせていては、決して明るい未来は望めないことは確かです。政府だけではなく、私たち市民も、より大きな視点をもたなければなりません。ありきたりな主張を並べるだけでは不十分です。巨大な力の根源には本当は何があるのか、また人類はどこへいこうとするのかを大いに議論することが必要です。たとえ理想論者だと言われようとも、私たちは未来へ希望をつなげるために、本当は何をしなければいけないか、という問いをもち続けなければなりません。子どもが政策の意思決定に関わっていくことは、非常に高い、むずかしいハードルです。しかし未来を担う子どもや若者自身が自らの世界を守りたいという純粋な思いを持ち続けること、それがとても大切であると教えられました。

国連ミレニアム開発目標*の中にも、水と衛生についての目標が定められています

井戸から水をくむアフガニスタンの子どもたち
©UNICEF/HQ01-0295/Shehzad Noorani

- 適切な飲み水が手に入れられない人の割合を2015年までに半分にへらす
- 適切な衛生施設（トイレなど）のない人の割合を2015年までに半分にへらす
- 2005年までに小学校と中学校での男女の格差をなくす

（たとえば、学校には男子トイレも女子トイレも整える必要があります）

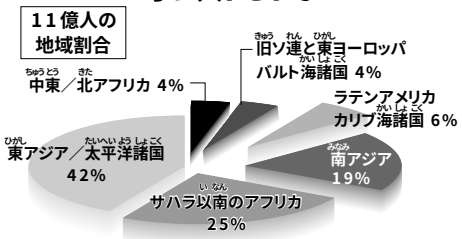
＊国連ミレニアム開発目標
世紀が変わるのを前に2000年に国連がさだめた世界全体の目標

どの地域の人びとが、水や衛生施設の不足に困っているのでしょう？

安全な飲み水

世界では11億人が安全な水を手に入れられない

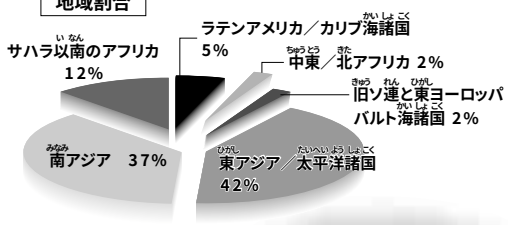
11億人の地域割合



衛生施設（トイレなど）

世界では24億人が衛生施設のない生活をしている

24億人の地域割合



©ガールスカウト

大きな井戸から水をくみあげるソマリアの女性や子どもたち。井戸にはおおいもなく、安全な水とはいえません。
また、アフリカ諸国では、ひどい干ばつが起こっており、人びとが日常で使う水の質が悪くなっているだけではなく、畑の作物にも大きな被害が出て、食料危機がおこっています。
©UNICEF/HQ00-0483/Radhika Chalasani

大鳥さん、吉田くんの感想

このフォーラムを通して、私は私たちの生活に欠かせない「水」についての世界のさまざまな実情と課題についての知識を得て、水問題に対する意識の向上をはじめとして、多くのことを学んだ。宣言文を起草する委員会に入ったものの、発言できなかったりと残念なこともあった。しかし、人間と水をふくむさまざまな資源、自然との関係が見直され、共生をめざしている現代社会の一員としての自分自身のあり方についての考えを深めることなど、得たものは数しれない。

プログラム時間外には、宿泊の部屋が同じだった韓国やインドネシアの参加者と学校や文化に関してのさまざまな話をしていることが多かった。ほかにも、歌やダンスをおたがいに教えあったりした。言葉の壁はあまり気にしないようにして、自分の意思や意見をできる限り正確に伝え、相手の考えを知ることにつとめた。言葉よりもむしろ、無意識的な態度が多くコミュニケーションに影響を与えることを改めて認識した。

フォーラムで何度もいわれた“水へのアクセス（水を手に入れること）”は人間の生活には欠かせない。すべての人の水へのアクセスが可能になるようにすることは私たちの義務だといえるだろう。水問題は私たちの存在と社会の基盤に深くかかわる複雑なもので、その解決にはこれからも子ども、おとなを問わず、それぞれの関心と努力が欠かせないことをフォーラムを通して痛感した。子どもが、今回のフォーラムで水問題について意見を表明する機会を、十分ではなかったとはいえ、与えられたように、子ども参加が社会のさまざまな面で尊重されること、子ども参加が水問題をはじめとする種々の課題に対しての効果的な行動となっていくことを期待したい。（大鳥　由香子）

『世界子ども水フォーラム』には、私たちのように子どもの権利に取り組んできた人だけではなく、川遊びをしたり環境問題に取り組んできたような、いろんなバックグラウンドを持った子どもが参加しました。

このフォーラムには、少し厳しい評価をしなければならないと思っています。子どもの参加といいますが、明らかに子どもが政治的に利用されたと思える場面がありましたし、私にはそれがショックでした。たとえば、『アナン国連事務総長夫人との交流会』があったのですが、いかにもアナン夫人と子どもたちが同じフレームに入った写真をとるためのものであることが見え見えでした。しかるべき通訳も置かず、多くの子どもは何が起こっているかわからず、声をあげることもできぬまま、プログラムは強引に進められました。

また、多くの日本の子どもたちが議論したかったのは『水の文化性』です。川遊びや河川調査を継続的にしてきた人にしてみれば、もっともです。実は多くの国では、川は不衛生で汚染されていることが多く、『川で遊ぶ』ことはあまりすすめられていないそうです。文化や考えを交換することが目的の今回の会議でしたが、最終アピールは、ユニセフが主張するような方向、つまり文化の水と生存のための水をくらべると、生存のための水の問題が優先される、というりくつで進められました。本来、それらは同じ土俵で語ることはできないと考えていたので、残念でした。

それから、期間中にイラク戦争が始まり、とても残念でした。イラクの人びとの命が失われる…それは戦争を経験した国からきている子どもたちにとって、自分自身の痛みでした。私たちは黙祷をささげました。まさに、子どもフォーラムで『水は命』というスローガンで話し合いがおこなわれていたそのときでした。10年前まで戦争状態にあったシエラレオネからの参加者は「戦争で使われる爆薬に含まれる毒が水にとけ出し、水は命をうばうものとなります」と主張していました。また、水フォーラムの報道は新聞の一面から国際面に追いやられ、数十年のうちに危機的な状況におちいる水の環境について、政府だけではなく多くの市民が参加して話し合ったイベントへの注目度が下がってしまいました。

否定的な評価をしてしまいましたが、未来の政策を左右する重要な会議に子どもが参加できたことは積極的に評価されると思います。個人的には世界のみんなと率直に話ができたし、多くの友達ができてよかったと思っています。『子ども参加』をホンキで考える必要を感じさせた会議でした。（吉田倫哉）